

## 糸賀一雄の社会福祉思想・序説

野口 周一<sup>a</sup>

<sup>a</sup> 湘北短期大学

### 【キーワード】

糸賀一雄 京極高宣 永杉喜輔 この子らを世の光に

### はじめに

京極高宣氏に労作『この子らを世の光に——糸賀一雄の思想と社会——』（日本放送出版協会、二〇〇一年）がある。氏は「まえがき」の冒頭に、

わが国では、周知のように、糸賀<sup>いとがかずお</sup>一雄（一九一四～一九六八年）は戦後「知的障害者福祉の父」として知られ、氏が提唱した「この子らを世の光に」とか、「発達保障」、「福祉の思想」などの言葉は、およそ福祉関係者で知らない人はいないと記す。

糸賀はそれほどの人物でありながら、京極氏はその研究史とその後の展望について、

ところで、大変奇妙なことに糸賀の人と思想についての専門的な単著は、今日に至るまで出版されていない。多くの福祉研究者や福祉実践家が糸賀の思想についてコメントしたものは膨大な数に及び、各々が我々に有益な材料を与えてくれている。

しかしながら、通常我々が安易に糸賀を障害者福祉の先駆者として理解しているだけでよいのか、果たして我々は糸賀の思想をどの範囲で理解しているのか、またその理解水準がどれほど高いものか、さらに近年の社会福祉改革との関連で糸賀思想をどのようにとらえるべきかについては、私は確信をもてないのである。ちなみに糸賀と生前交友のあった友人三木<sup>みやぎ</sup>安正<sup>やすまさ</sup>氏の思い出によれば、糸賀は「哲人・文人・行動の人」という三位一体の人と記されている（『糸賀一雄著作集』Ⅰの月報参照）。と述べ、「それだけ幅広く奥行き深い実践的な思想家であるので、その全体像が把握しにくいことは事実であり以上の論点を探るにしても難題であることは明らかである」と問題提起しているのである。京極氏の視点を踏まえると、私たちは糸賀のまさに「哲人・文人・行動の人」という諸相に、それぞれの立場からアプローチしていくことであろう。

筆者は下村湖人研究をライフワークにしたいと希い、湖人の愛弟子である永杉喜輔についてはほぼ分析しえたものと自負している。その永杉の大学の後輩にあたり、終生親交のあった糸賀について、筆者は永杉を通して言及してきた。

本稿は、筆者がものした拙い糸賀論を再掲載することにより、糸賀の社会福祉思想を解きほぐしていく下地にすることを目的とする。

なお、本稿では、呼称、用語やそれに基づく言及については、歴史的資料を尊重し、科学研究と今後の思想の発展を願う見地に立つて、原本で用いられているものをそのまま掲載した。

一、愛と共感の教育を説いた糸賀一雄

筆者は『生きる力をはぐくむ——永杉喜輔の教育哲学——』（開文社出版、二〇〇三年）において、標記のテーマについて永杉との対談という叙述形式で説明したことがある。

本書は四部構成であり、第一部は「永杉喜輔論——その人と思想——」、第二部は「煙仲間とその人物群像」、第三部は「忘れ得ぬ人々——さまざまな出会い——」、第四部は「人間を見る目・教育を見る目」となっている。

本節は第三部に収録されている。これは永杉の生涯において、それぞれ大きな影響を与えた人間像を描いたものである。以下引用する。

野口 糸賀先生は『この子らを世の光に——近江学園二十年の願い——』（柏樹社）という本で、その存在を世の中に知られた方ですね。

永杉 糸賀は私の京大哲学科の後輩だ。西谷先生の教え子だよ。作家の水上勉の「拝啓 総理大臣閣下」でスポットライトを当てられた精神薄弱児教育に、いち早く手をつけたのが彼だった。

野口 書名の「この子らを世の光に」は「この子らに世の光を」の間違いではないんですか。

永杉 「この子らに世の光を」の方は、日本の情緒があつて甘さがあるね。だけど、精神薄弱児の教育はそんな甘いもんじゃない、実に厳しいんだ。「この子らを世の光に」というのは『聖書』の言葉だね。この子らを世の光にして生きよという意味だ。だから、近江学園には、母が三人の子を抱いた像があつ

て、その台詩には「世の光」とある。

野口 そうすると先生は、近江学園創設の経緯もご存じなんですね。うん。糸賀はね、戦争直後の混乱期に滋賀県の食糧課長に抜擢されたんだ。青天の霹靂といわれた人事で、知事にその能力を見込まれたんだ。ところが、夜も寝ずに奮闘しているうちに血を吐いて倒れた。琵琶湖畔の堅田の浮御堂の上の異様な一室に静養しているうちに、「忘れられた子ら」の教育を発心したんだね。

野口 『忘れられた子ら』とは。

永杉 『忘れられた子ら』という、当時京都の小学校で精神薄弱児の教育をやっていた田村一二が書いた本があつてね、これは当時ベストセラーになり、映画化もされた。この田村を滋賀県に呼んで、石山寺の奥で精神薄弱児教育にうちこませたときの厚生課長が糸賀だったんだ。あと池田太郎がいる。彼は糸賀が京大を出て小学校教員をしていたときの仲間だ。結局、糸賀はこの田村、池田の二人を抱き込み、芋粥をすすりながら、琵琶湖畔の景勝の地に近江学園を建設し、精神薄弱児と戦災孤児の友情学園とした。

野口 友情学園ですか。

永杉 そうだよ。話は戻るが、静養中に発心した糸賀はある日私の家に来て来た。あらかた治ったとはいうものの、頬骨が目立ち、目だけはいつものように光っていた。

野口 そこで、糸賀先生はどんなお話を。

永杉 彼は三畳の書齋に座るなり、いきなり精薄施設を始めると切り出した。すでに趣意書の草稿を手持っていた。役人としての再起を期待されていたのに、何でそんなことをやるのかというと、民主主義は万人が幸せになる主義だ、精薄といえ

ども人間なのだ、それは日本人の何パーセントかに過ぎないと言われているが、彼ら一人一人はせっかく人間として生まれたからには、みな一〇〇パーセント生きたいはずだ、しかし彼らはその生活権を自分で主張する力はない、一体誰がそれを代弁するのか、——糸賀は情熱を込めてそう語ったものだ。

野口 趣意書にそう書かれていたんですな。

永杉 糸賀は、だから精薄児教育もさることながら、その教育に当たる人の養成が大切だ、そういう人を中心にして彼らの代弁者を増やすんだ、というんだね。手に持った趣意書には指導者養成も使命とすることがちゃんと書いてあった。

野口 それからどんな風に展開していったんですか

永杉 気の早い二人は、あくる日の新聞にその趣意書を発表した。こうなると、もう抜き差しならぬことになるからね。それから、糸賀がどんな苦勞をして近江学園を建設したかは『この子らを世の光に』を読んでもらいたいな。

野口 そのご苦勞の一端をご披露いただけませんか。

永杉 その職員の一人に、私の教え子だったのがあるんだが、彼女がこんなことを言っていた。「いつだったか、園長先生は陽だまりで楽しそうにおしゃべりしながら、ままごと遊びをしている子どもたちを窓越しに眺めながら、いくら私が偉そうなことを言っていたって、あの子どもたちと無心に遊ぶことはできないんだから淋しいね、とおっしゃいました」。これを聞いてね、私は糸賀が精薄児に捧げたばかり知れない愛情の深さをしみじみと感じたねえ。

男らしい男だった。借金の名人だったなあ。借金をしたときの手紙が私の手許に数通あるが、返すあてもないのによう貸

してくれたと書いてある。心ある人は不思議に彼には金を貸した。その借金を七千万ほど残したまま、講演中に倒れて死んだ。

野口 『毎日新聞』の「余録」欄は、彼の事績をたたえて、「五十四歳という働き盛りに忽然と世を去った糸賀さんは日本の文明を質的に高めた先駆者である」とその死を悼んでいましたね。昭和四十三年（一九六九）のことでした。

永杉 『朝日新聞』の「天声人語」でも、「糸賀氏の心は生きて、ひろがっている。糸賀の負債は国民の負債」だが、同時に政府の負債であることを為政者は痛感しているだろうか」と書いてあったな。

野口 この糸賀先生の情熱、そして企画力、決断力、実行力といったものは、どこから湧き出してきたものなんですか。

永杉 本人の素質も当然あるね。何をやらしても有能だった。県庁に入るとすぐに課長になり、教育、厚生の仕事をした。あとそうだね、さつき話したけど、糸賀が食糧課長に抜擢されたと言ったね、近藤壤太郎知事によつてだ。近藤知事に鍛えられたこともあるだろうね。

野口 近藤知事はどんな方だったんですか。

永杉 官選知事だったがね。彼は正しいことがメシより好きな人で、インチキ役人や議員には「やめろ！」と怒鳴ってはかりいたんで、滋賀県知事から神奈川県知事に栄転したときは塩をままともだが、嘘つきという奴は承知せんぞ」と息巻く御仁だった。糸賀が病気で倒れても、枕もとに来て相談していたなあ。むごいことをする知事だと私は恨んだものだよ。

野口 食糧課長という仕事は大変なものだったんですか。戦後の混

乱期といえ、今では想像もできません。

**永杉** 当時、一番難物といわれていたね。このポストは誰がやっても続かぬといわれていた。糸賀は全国で一番長く続いた食糧課長だったと思うよ。

**野口** 何か思い出すことがありますか。

**永杉** そのころ着るものに困ったことがあったなあ。糸賀に頼んだら、彼は一枚の切符を私にくれた。それで国民服を一着新調することが出来た。それを仕立てに行ったら、その主人が糸賀さんは自分の服は一着も作らず、人の服ばかり作ってやりますねえ、と言った。あと、そうだなあ、みんな飢えに苦しんでいたんだ。私が師範学校の付属小学校長だったときだ。突然、大豆が一俵、学校に届けられた。先生も子どもたちも飢えているだろうと思っただろうね。それをやわらかく煮て、子どもたちと食べたときのうまさ、今でも舌の先に残っているねえ。

**野口** ご自分のことはさておいて、他者にやさしい方なんですわねえ。ところで、糸賀先生は講演中に倒れられて帰らぬ人となったということですが、その最後の講演はどのような内容だったんでしょうか。

**永杉** 最後の講演のテープを私が『愛と共感の教育』と題して出版した。糸賀はね、「共感」ということをね、まずこう言ってるんだ、「心身障害とか、精神薄弱とかいわれる人々とわたしたちが、実は根が一つなんだ、本当に発達観から見ても根が一つだ」という共感の世界を——理屈の上でもせめて共感の世界というものの根拠があることを、わたしたちは知りたいたいと思います」とね。つぎにね、「ただ本当に共感できるかどうかは年季がかかります。人間的愛情が教育的愛に高まっ

ていくというのには、接触の年月がかかります」。

**野口** 理屈じゃなく接触の長さでそれを克服できると言ってるんですね。

**永杉** そう。「年月がかかりますけれども、人間的な愛情というものがだんだんと昇華されていきます。そしてやがて、わたしたちの心に本当の愛、人類における愛、あるいは自分をも見つめる愛、そういうものが成長してゆくわけなんです」とね。

**野口** 人間的愛情が人類愛にまで高められるということですね。

**永杉** 糸賀は人間の道行きそのものが、本来そう歩むに違いないんだと言っているね。

**野口** 私に読ませてください。「もちろん一挙には到達はできませんけれども、それが人間となっていく道行きであるならば、わたしたちは必ずこの道を歩みたい。また、歩まねばならないし、歩むに違いないその道なんです。本来、わたくしたちはそういうものを持っているんですから、そう歩むに違いないのです」。

**永杉** 糸賀は愛情の育ちと教育愛への高まりということを、最後に言いたかったんだと思うよ。「わたくしは今理屈をいっている。皆さんとともにその理屈が理屈でなくて、自分の本当の心の動きとなるまでに育つ。何年かかってもいいじゃありませんか。もう、その道行きも目標もはっきりしてるんだから、何年かかってもいいから、あわてず急がず、本当にわが心の中に愛を育てていきたいと思えます」と言ってる。

**野口** 糸賀先生は行政畑と学園建設の過程で、世俗の辛酸は舐め尽くされているわけですね。それでもなおかつ、この高い理想を掲げられているわけですね。

## 二、教育と福祉

筆者は『ぐんまの社会教育——永杉喜輔のあゆみ——』（みやま文庫（代表：群馬県知事）、二〇一三年）を著した。これは群馬県をフィールドにするテーマを叢書としたものであり、筆者は群馬大学で社会教育指導者の養成に生涯を賭した永杉喜輔の執筆を要請されたのであった。

本書は三部構成であり、第一章「教育力——永杉喜輔の人と思想——」、第二章「地域力——煙仲間 の 提唱と活動——」、第三章「家庭力——家庭教育の復権——」からなる。「教育と福祉」は、第一章の中の（三）「教育活動」の5番目の項目である。

また、筆者は前著『生きる力をはぐくむ』を執筆した際、前節のテーマに関わるものとして、貞松直孝著『施設の灯』（あさを社、一九八一年）の存在を全く失念していた。従って、本節は前節と異なり、貞松氏の問題提起を基底に据えて、永杉に糸賀の存在意義とその生き方について質問を畳み掛けていくのであった。以下引用する。

永杉は群馬大学の講義「児童福祉」を担当したことがあり、その時はテキストに糸賀一雄著『福祉の思想』（日本放送出版協会、昭和四三年）を用いた。

糸賀は近江学園の創立者であり、学園建設の苦闘を『この子らを世の光に——近江学園二十年の願い——』（柏樹社、昭和四〇年）に著し、「精神薄弱児の父」と慕われたのであった（現在精神薄弱児は知的障害児と呼ばれている）。

### ① 永杉と糸賀一雄

糸賀は、永杉の京大哲学科の後輩にあたり、その交友は深かった。戦争直後の混乱期に、糸賀は滋賀県の食糧課長に抜擢され、寝食を忘れて奮闘しているうちに、ついに結核で倒れた。そして、糸賀は琵琶湖畔で静養しているうちに精神薄弱児教育に発心したのであった。

ある日、糸賀は永杉の家を訪ね、その三畳の書齋に座るなり、いきなり精神薄弱児施設を始めると切り出したのであった。糸賀の手には、すでに趣意書の草稿が握られていた。永杉が「役人としての再起を期待されているのに、何でそんなことをやるのか」と問うと、糸賀は「民主主義は万人が幸せになる主義だ、精薄といえども人間なのだ、それは日本人の何パーセントかに過ぎないと言われているが、彼ら一人一人はせっかく人間として生まれたからには、みな一〇〇パーセント生きたいはずだ、しかし彼らはその生活権を自分で主張する力はない、一体誰がそれを代弁するのか」と情熱を込めて語った。また、精神薄弱児教育もさることながら、「その教育に当たる人の養成が大切だ、そういう人を中心にして彼らの代弁者を増やすんだ」と言い、趣意書には「指導者養成も使命とする」と書いてあった。そして、糸賀は田村一二と池田太郎の二人を抱き込み、芋粥をすすりながら、琵琶湖畔の景勝の地に近江学園を建設し、精神薄弱児と戦災孤児の庇護と教育にあたった（「愛と共感の教育を説いた糸賀一雄」）。

昭和四十三年（一九六八）九月十七日、糸賀は大津市で「施設における人間関係」と題して講演を行ない、その最中に倒れ、翌日亡くなったのである。その講演のテープを永杉が編集、『愛と共感の教育』と題して出版するのである。永杉は、その題名にある「共感」について、「心身障害とか、精神薄弱とかいわれる人々とわたした

ちが、実は根が一つなんだ、本当に発達観から見て根っ子が一つだという共感の世界を——理屈の上でもせめて共感の世界というものの根拠があることを、わたしたちは知りたいと思います」、「ただ本当に共感できるかどうかは年季がかかります。人間的愛情が教育的愛に高まっていくというのには、接触の年月がかかります」と糸賀の言葉を引用し、「理屈ではなく接触の長さでそれを克服できる」という糸賀の信念を強調するのである。また、永杉は糸賀の「年月がかかりけれども、人間的な愛情というものがだんだんと昇華されていきます。そしてやがて、わたしたちの心に本当の愛、人類における愛、あるいは自分をも見つめる愛、そういうものが成長してゆくわけなんです」、「もちろん一挙には到達はできませんけれども、それが人間となっていく道行きであるならば、わたしたちは必ずこの道を歩みたい。また、歩まねばならないし、歩むに違いないその道なんです。本来、わたくしたちはそういうものを持つているんですから、そう歩むに違いないのです」、「わたくしは今理屈をいつている。皆さんとともにその理屈が理屈でなくて、自分の本当の心の動きとなるまでに育つ。何年かかってもいいじゃありませんか。もう、その道行きも目標もはっきりしてるんだから、何年かかってもいいから、あわてず急がず、本当にわが心の中に愛を育てていきたいと思います」を紹介し、「糸賀は愛情の育ちと教育愛への高まり、ということを最後に言いたかったんだと思う」と述べている。

## ② 永杉と糸賀に惚れた青年

貞松直孝は、大学卒業後に国立コロニーのぞみの園に勤め、永杉の国立コロニーにおける講演記録「精神薄弱者の福祉——糸賀一雄の人と思想——」に出会う。貞松の勤務は昭和五十年からであり、その講演は前年の十一月のことであった。講演記録に魂を揺さぶ

られた貞松は永杉の許を訪ね、やがて糸賀に傾倒していく。貞松はその数年後には『施設の灯』（あさを社、昭和五六年）を上梓した。この書は、第一部「この子らに学ぶ」、第二部「福祉とは——永杉喜輔先生に聞く——」から成っている。

この「福祉とは」は、昭和五十五年十二月十五日に貞松が前橋の喫茶店アロームで永杉にインタビューし、それをテープから起こしたものである。まず、貞松の永杉への質問項目をみると、①「福祉の原点について」、②「福祉とはいったい何か」、③「人間とは何か」、④「障害者の生き甲斐について」、⑤「この子らを世の光に」とはどういうことか」、⑥「糸賀先生もずい分迷われたんでしょね」、⑦「私は糸賀先生の通った道を目指して自分なりに歩みたいと思っているのですが」、⑧「施設で大切な点は職員と園生のよい人間関係で、それにより私も園生も人間的な成長を遂げることができると思うのですが」、⑨「私たちは子どもたちの親になると近づき努力は必要だと思うのですが」、⑩「将来の福祉のあり方について」、⑪「最後に先生が特に強調しておきたいことは」、以上十一項目にわたっている。以下、永杉の発言を筆者なりに抜粋して記録していく。

① について：「肢体不自由児であろうが、精神薄弱児であろうが、病人であろうが、世界にたった一つしかないのちなものです。そういう人たちが精いっぱい生きることを助ける、生きる喜びを与える。これが福祉なのです。それにはどうしたらよいかということですね。誰もが最高に生きたい。そのことをいつも忘れないようにしないと、教育でも福祉でも、やる側の問題だけになってしまふ。人によってあげる、それにはどうしたらよいか先に出て、相手の状態がいったいどうなのか、それを見ているつもりでも実は盲なのです。今は教員も親も盲になってしまっていますね。子どものことを考え

ているつもりで、実は自分のことしか考えていないというのが多いのです」。

②について：「福祉という特別なものがあるわけではない。それは教育という特別なことがあるわけではないのと同じです。あるというのは錯覚なのです。私たちが生きていくということは現にある。自分が生きていく。この自分はどうか生きていくのかという問題からすべて出発しないと間違ってくる。その中に福祉も教育もあるのです。家庭の中でも福祉は行なわれています。病人が出れば看護するでしょう。家庭の日常生活の中にすべてがあるのです。それと福祉は別だと考えるから、例えば青少年のグループで、老人ホームやいろんな施設を訪問したりすることだけが福祉と考える人がいる。そして家にいる寝たきり老人を放っておくというおかしなことになってくるのです。そういう福祉活動は格好だけです」、そして具体的に「老人に席もゆずらないような若い人が、老人ホームを訪問したらそれで福祉活動をしたという気になっているし、また世間でもそう認めるというところに、今日の福祉が——人間が生きるという原点を失って、何か福祉というものがあるというふうに、自分の外に福祉を見ているのです。自分が生きていく、そのことが福祉とつながっていないならばならない。どういう時に自分は幸せを感じるのか。それを自分の経験を反省することによって知る。道で倒れている子がいたら、起したらよいのか、起きないのがよいのかということを真剣に考えることが福祉でしょう。倒れて甘えて泣いている子だったら起してはいけない。『がんばれ、起きなさい、ひとりで』と激励することが福祉でしょう」、「学校という建物があるから、あそこで教育が行なわれていると錯覚しているだけです。家庭教育という、何か家庭で教育しようと思えばできるという錯覚がある。できっこないですね。親がどう生きるかということが根本問題です。

そのへんのところは弱いのです。福祉だ、教育だという何かそういう世界があり、そういうことができるみたいに錯覚するわけです」と述べる。

③について：「人間とは何か。その人間はどこにもいない。男でも女でもないのが人間ですからそういうものはどこにもない。いるのは自分です。いつも『人間』という字があつたら『自分』と読みかえてみよと、私は学生に言っています。それで解つたら解つた、解らなければ解らない、そこから出発するのです。つまり、人間は人間は、というとか何か自分の他に人間がいるかのように錯覚するのです。そういう一般論をやたらというものだから一般があるみたいに錯覚しているわけです。あるのは個しかない。個しかないけれど、その個が個だけで生きてゆけないから、『人間』という言葉になるわけです。文字どおり、人と人との間でしか個は育たないのですね」。

④について：「私が生きていくことも、彼ら障害者が生きていくことも同じなのです。それが身体的な条件とか、まわりの条件が違うから、それに適応して生きるにはどうしたらよいかということ、生き方の違いはありますがね。それがまだ『この子らに光を与えよ』になっていきますね。『この子らを』でなければならぬのです。あれだけ純真な、悪いことひとつもできない、悪知恵もないのですからいざいざいいのです。そういう人を利用したりしている大人が悪いのであって、子どもや精薄者が悪いのではない」、「私はいつも『青少年対策』という言葉は、やめろって言っているのです。対策すべきは大人なのです。大人にこそ対策を向けなければならぬ。やはりこの子らを先頭に立てて、この子らこそ世の光だということですね。それは慈善とか同情というのと、今日の福祉の決定的な違いではないですか」。

⑤について：貞松は「彼らの純真な心を学び、そして彼らの精一杯生きていく姿を私たちの生き方の中にとり入れることが『この子らを世の光に』することができると思うのですが」と問うと、

永杉は「そうです。そのとおりです。糸賀君の『この子らを世の光に』という本一冊読めば、あの中にそのことがずうっと入っていて、解説したところでわかりませんね。『この子らに世の光を』ではなく『この子らを世の光に』という』を」と『』の間違いだというようなことをいって見ても、頭ではわかるけれども、糸賀君が実践のなかで、あれを感じたということは言葉にはならないのです。ですから、わざわざあれをくどくどと解説しなかったということは、かえってよかったですと思います。言葉の解説だったらいくらでもできます」と答え、「親はあくまでも親であり、子はあくまでも子であるという厳格な自覚が親子を近づけてゆくのです。これは非常に矛盾したことのようにですが、そうでないと、つい自分に甘くなってしまうのです。理解のある親というのがくせ者で、子どもの人気とりになりかねない。ほんとうの理解はそんな甘いものではないのです」と「理解のある親」とは何かという問題にまでいたる。さらに、「自分は精薄のことはわからない。わからないでこうしてやっていいのだからかという、その自覚が特殊教育をやる人に必要でしょうね。つきつめていうと、人間が人間を教育することは不可能ということの自覚ですよ。ですから一生懸命にやったところで、自分は環境のひとつにすぎないという、非常にはつきりした自覚を糸賀君はもっていたと思うのです。そうでないと自己満足だけで一生を送ったということになってしまう。それだけの自覚に達するには、糸賀君は子どもどころから人一倍苦勞して、人生に疑問をもって宗教哲学という理論を京大で学んだのです。そういう糸賀君だからこそ、この子らを世の光に、ということができなのです。しかし、ただ経験するだ

けなら誰でもできますが、その意味を自分なりにかみしめるためには学問をしなければなりません。問題は自分のやったことの意味を知ることにあるのでして、自分の外のことを知るためではないのです。ソクラテス以来『汝自身を知れ』です」と、「人間が人間を教育をすることは不可能」、学問の意味にまで説き及ぶ。

⑥について：「糸賀君もいろんなことをやり、あっち行きこっち行き、ずい分迷ったのです。迷い迷い一生つづけたのです。私が『この子らを世の光に』という本でいちばん感動するのは、糸賀君が近江学園を十年ほどやって、どうにもならなくなったのです。これは誰が悪いんでもない、自分が悪いんだと思うと、やり切れなくなつて、夜逃げをしました。そしてあてもなく汽車に乗って白浜温泉に行つたのです。お金はない。一軒の漁師の家に泊めてもらつて、ただ何となく毎朝、露天風呂につかっていたのです。するとある朝そこに波がうち寄せては返ししているのに気がついたので。この波は何億年も同じことをくりかえしているのだ。たった十年で何がわかるか。それに気がついて糸賀君は思わず立ちあがって『ワァー』と叫んだのです。こういうことがきつかけになつて再起して、死ぬまでつづけたのです。永遠に絶えない波に比べると人間のいのちは一瞬にすぎない。だからこそ大切にしなければなりません。糸賀君のいのちも精薄児のいのちもそうなのです。そこに糸賀君は気がついたのですね」。

⑦について：永杉は、まず「せいせい糸賀君の真似をしたらいい。そしてあの道を辿っていけばいい。しかしそれは糸賀君の歩んだ道そのものではない。君の歩いている道なのです。きまつた道なんてどこにもありません。人が道をつくつたら歩いてやろうというのとは、とんでもない間違いで、自分の道を自分でつくるんです。みんな一人一人つくっているんです。これがほんとうの道です。今は

誰かが道をつくってくれたら歩いてやろうという、そういう安易な「気持ちの人が多すぎる」と説き、「糸賀君みたいな人は、ひとつの頂点であつてあれを真似ていこうと、一生懸命批判も何もしないでついていけばよい。批判は誰でもできます。盲目的でいいから、ぞっこん惚れこんだらその人の真似をしよう」と一生懸命やればよいのです。そうしているうちに、自然にその人のもち味が、糸賀君とは違つたもち味が出てくるわけです」と、「ぞっこん惚れこむ」ことの大切さを述べる。その意味するところは、「学ぶということとは真似ることです。徹底的に真似したらいい。徹底的に真似ているうちに、自然と個性というものがにじみ出てくる。それが本当の個性で、はじめからガラガラしているのは個性ではない。鍛えられてはじめてにじみ出すのが真の個性です」と言うところにある。このことについて、永杉は「個性をいかすつてことは自分が好きなことをやるというんじゃないな。ナマの個性はいっぺんつぶさなくちゃいけない。型を教える、型に入れる、その型を破つたところから真の個性が出てくるんだな」（『生きる力をはぐくむ』）とも語っている。そして、「福祉をやっている人は、まず自分を自分で鍛えるということが非常に大切になってくる。自分が自分を鍛えないで、人を鍛えることはできない。福祉も教育もそこが大切ですね」と、福祉と教育が同根であることを明確にしている。

⑧について：「自分自身が人間的な向上を目指してゆけば、よりよい関係をつくつていかざるを得なくなるのです。関係、関係というけれども、自分がしゃんとしないと、よい関係つてできないでしょう。ですから、いくら教え方がうまくても、いくら学級経営がうまくても、それだけでよい教師とはいえないのです。よい関係をつくるには、自分自身が無限の向上の努力をする、それ以外に、よい関係をつくりようがない。それが自然によい関係になるということ、

そして人と人との接触のなかでしか自分自身はできていかなないので。人と人が、ごちゃごちゃにもまれながらしか、向上のチャンスはないわけです。そうすると自然と人間関係のなかで自分自身も育ち、相手も育つてゆくことになるわけです。教える方の教師の側の厳しい自己管理、自己訓練、そういう態度を学ぶ者が真似るのです。ぐうたらな教員からは、ぐうたらな生徒しか生まれません。親もまた同じです。ほんとうに学んでいるのは、知識ではなくて、生き方ですよ。態度ですよ。生徒が先生の話聞くのは、試験のためであつて、ほんとうは先生の態度を見ているのです。言うこととすることがウラハラだから、生徒になぐられるのです」——ここでは「真似る」とか「手本」の問題が出て来ている。何を真似るのか、手本とするのか。それは「生き方」であり「態度」であると、永杉は即座に答えている。

⑨について：永杉はまず例をあげる、「施設のある人が十年間、いつやめようかいつやめようかと思つていたというのです。そうして十年たつたら、自分がやめたらこの子たちは、いったいどうなるのだろうかと思うようになったというのです。これはある意味では、思いあがりですが、それが親ごころというものでしょうね。長いあいだ接触していますと、自然と情がうつるものです。親ではなくとも親に似た情がわいてくる。親もただ子どもを生んだから親ではなく、抱いて苦労して育てたから親でしょう」と。そして、「一番大事なことは、長い間その子たちと接触したという、そのことです。長い間の接触以外に、愛情の深まりようはないですね。生んだとか生まんとかいうことではないのです。愛情、愛情と私たちは簡単に言うけれども、大変なことなのです」と「接触と愛情」に説き及ぶのである。

⑩について：永杉は、ここでふたつの提言をする。ひとつは、「もつ

ときめ細かな福祉の政策と実行をやらなければと思います。今は行政でやっているでしょう。例えば、私が敬老会で三千円もらったのです。みんなに三千円ずつばらまいているのです。私は働いているから、もう必要がないのです。そういう人にやらないで、本当に困っている人たちにやるといいうぐらいいの、きめの細かさが必要なのです。この老人には働いてもらう方がよいと思う人には、金をやらないで働かせなければいけない。私自身も、その三千円は返さなければいけない」とあり、もうひとつは「福祉に従事する人をもっと念入りに教育することですね。自分がもつとしゃんとしなければ、どうしようもならないという自覚を与える。そのためには、国として長期の合宿をしたり、生活を共にしたりして教育する必要がありますね。生活を共にすることによって新しい生活を創りあげるといいう教育です。上から教えるのではなく、同志同行という教育です。そういう生活の中で、人間の幸せとは何かをお互いに考え合おうのです。それはおそらく難行苦行でしょう。しかし、難行苦行をのり越える以外に幸せはないのですから、自分が幸せをつかむためにはそれ以外にないのです。それには、そういうことを心得た指導者が必要ですね。ただ福祉の知識をつぎこんだり、資格をつけたりするための研修では、福祉の味がわからない。めいめいが自分で味を作り出すことが大切ですからね。自分でしっかりとみしめなければ味はわからない」とある。後者は「生活を共にする」、「同志同行」という教育につながる。

⑪について：永杉は「現場の人が一生懸命に打ち込んで、いろいろな問題をハダで感じる。それを行政側に訴えて、行政のあり方を少しずつでも正していくことが必要だと思います。あきらめないで執念深くそれをやることです。あきらめないで、まず自分でやるだけやる。やりながら訴えるのです」、「社会が悪い、制度が悪いとぼや

いているうちに、子どもはどんどん成長するのです。社会や制度があらたまらなければ何にもできないというのでは、日に日に成長する子どもののちは、いったいどうなるのですか。今の制度のなかで、できるだけのことをやらなければならないのです」として、「まず一番必要なことは、福祉に従事している人が今の福祉機構の中で、自分の良心に従ってできる範囲のことを精いっぱいやる。そのうえで世論を変えていくということです。今の教育制度が害を流していると思えば、せめて自分の子どもだけでも被害者にならないようにやるということが、まずやらなければならないことではないでしょうか。私はそうしてきましたよ」と説く。そして、「先日の群馬県青少年問題協議会で知事に答申したとき、『青少年非行も社会が悪い、政治が悪いという。いったい社会は誰がつくってるんだ、大人でしょう、だから大人が悪い』と言ったんです、それが上毛新聞にそのまま書かれています」と大人の問題の重要性にいたるのである。

(四八一―六二頁)

#### おわりに

京極氏の『この子らを世の光に』に加えて、野上義彦著『糸賀一雄』(シリーズ 福祉に生きる 5) (大空社、一九九八年) も大いに参考になる。本書について京極氏は「青少年女向きに書かれているものの、資料及びアイディアの両面で本書の執筆に大いに参考にさせてもらった」と評価している(京極前掲書、一一頁)。言うまでもなく、その本質は青少年女向きであろうと大人向きであろうと変わるものではない。

ここで筆者の研究領域に関わる論文として、蜂谷俊隆「糸賀一雄と下村湖人——「煙仲間」運動を通して——」(『社会福祉学』第

五〇巻第四号、日本社会福祉学会、二〇一〇年）をあげておきたい。氏が「おわりに」の末尾で述べられている「とりわけ糸賀の社会福祉協議会論は、田沢や下村が構想した壮年団のあり方がひな形として存在していることがうかがわれる」（五一頁）という個所に注目した。すでに「近江学園を中心とした施設運営やアクションとの関連において考察していく」（五二頁）と予告されているので発表されているのかもしれないが、その実証的研究が俟たれる。

筆者の目論見としては、今後京極氏の前掲書における各章各節が研究テーマになるであろう、ということの問題提起しておきたい。